

現場で培った動かす力で 青梅から東京大改革!

都民ファーストの会 東京都議団

森村 たかゆき

東京都議会議員/青梅市選挙区

プロフィール

1973年生まれ。東京大学経済学部卒業後、伊藤忠商事(株)木材建材部、プルデンシャル生命保険(株)立川支社勤務を経て2006年から(株)保険見直し本舗にて取締役を務める。

2017年7月の東京都議会議員選挙で初当選。都民ファーストの会、東京都議団 政調会長代行。新型コロナウィルス感染症対策プロジェクトチーム事務局長。中央大学客員研究員。

4年間で1000を超える政策に取り組む

都民ファーストの会では、会派を代表して政策を作る政調会で政務調査会長代行を務め、政策実現に関わる取組を推進しました。

たとえば都民ファーストの会には前回の選挙で掲げた公約が377件あり、これを4年に渡り進捗管理を行いました。また、毎年末に知事宛に翌年度の都の事業で実施すべき政策を提案し、また既存事業の改善点などを提案する「予算要望」という取組があるのですが、私が中心になって令和三年度の予算策定に向けてまとめた要望書は大小合わせて1700項目以上の政策集となりました。こうした政策を作り上げていくプロセスそのものを私自身が設計し、進捗管理をしてきた結果、多くの政策を実現することができました。

都政レポート 2021年6月号



本町の朝顔市にて
太鼓の演奏に耳をます息子

子どもの「生きる力」を育む青梅をつくりたい

私は4歳の男の子と1歳の女の子を育てています。育児について学ぶ中で、幼い頃に培った力が人間の一生を支える根本的な力に結び付くことを知りました。変化の激しい時代を生き抜くためには、自分で課題を探し、問題を解決する資質や能力、すなわち「生きる力」が必要です。

生きる力につながる能力には、記憶や計算などに必要な「認知能力」がある一方で、粘り強く物事にあたる力、辛いときでも「なんとかなるさ」と前を向く力、「なるほど、そういう考え方もあるね、じゃあやり方を考えてみようか」と他者を受け入れながら協力しあう力など、学校のテストには表れにくい力があります。これらは「非認

知能力」と呼ばれ、おおむね6歳くらいまでに培われると言われています。

昔は認知能力が高い人が社会で成功すると考えられていましたが、今は非認知能力が高い人のほうが成功しやすいという研究もあります。この非認知能力の育み方には様々な形がありますが、自然の中で遊ぶことを通じて育まれることが指摘されており、「子どもの生きる力を伸ばせる青梅に住みたい」と言われるような環境を作るべく、教育の専門家や、自然を活かす取組を得意とする人たちと連携して動き始めています。



地球規模で考え、 足元から行動する

Think Global, Act Local!

1期目の終わりの節目に、都議会議員になるまでの歩みについてインタビューを受けました。



地球規模で社会課題を 解決する人になりたい

——現在の政治活動につながる「原体験」を教えてください。

小学生の頃『地球環境報告』という本を読んで地球環境に興味を持ちました。そこで生態系の破壊や、森林の消失について知ったものの、小学生だった私にできることは限られています。

「地球が滅びてしまうかもしれないのに、大人たちは何をしているんだ」と思ったことを覚えています。強い危機感を覚えた私は、いつしか地球上の社会問題を解決する人になりたいと思うようになりました。

——その夢を叶えるために、どんなことを学びましたか？

いずれ国家公務員になりたいと思いながら、東京大学で経済学を専攻し「開発経済学」の中西徹先生のゼミで貧困の解消と経済の発展について学びました。「ソーシャル・フォレストリー（社会林業）」を研究し、学士論文を書いています。東南アジアの熱帯雨林の消失をどのように防ぐのかという課題に対してとられた林業の手法です。

熱帯雨林の消失にはいくつかの原因があり、原木の輸出などを目的とした乱伐が3分の1。残りの3分の2は貧しい地域住民の薪炭材として、盗伐や焼き畑による消失が原因とされていました。

後者を解消する目的で生まれたのが前述のソーシャル・フォレストリーです。

住民を組織し、森を育てる仕事や森の中で育つ作物の生産に従事してもらうことで収入を得る道を作り、「森を壊す人」から「森を守る人」へ変えながら貧困を解消していく手法でした。

社会の課題を解決するためには、どのように人のモチベーションを転換するか、その仕組み作りの大切さを学びました。



乱伐や盗伐、薪炭材として
熱帯雨林は確実に消失していっています

——総合商社の木材建材部で
地球に優しいビジネスを目指す

——卒業後は社会課題を解決する仕事に就けましたか？

在学中は公務員になり、社会課題と向き合いたいと思っていましたが、当時目を覆うような官僚の不祥事が続き、モチベーションが下がりました。そして、「自分は国際的な舞台で激しい競争に揉まれながらビジネスマンとして成長した上で、経済の世界からよりよい世の中を作

れるようになりたい」と考えるようになりました。

——ビジネスの修行の場としてどんな会社を選んだのですか？

総合商社です。志望した理由は大きく三つあります。

一つは、商社の取り扱い品目は幅広く、商材に縛られずにビジネスを学べること。二つめは、グローバルな仕事ができること。そして三つめは若いうちから大きな仕事を任されることでした。

伊藤忠商事への入社にあたっては、「熱帯雨林の伐採について問題意識をもっています。環境にやさしい方法で、かつ採算を得られるビジネスにするから私にやらせてください」と役員面接でプレゼンし、木材部への配属が決まりました。

入社後は、廃材から建材を製造する事業に従事。国際物流と貿易実務、資金調達と為替管理、在庫や与信の管理など、ここでビジネスの基礎を学びました。このように、学生時代から20代前半にかけて世界の森林産業や木材ビジネスに関わってきたため、現在は東京の林業に強い関心を抱いています。



青梅市はこういった森林が
実際に面積の3分の2を占めています

社会問題を 力を合わせて解決



チャリティーランニング大会を開催して集めた活動資金。
累計で約1億円の寄付が世界の子どもたちや被災地に贈られました。

社会人1年目に奨学金基金を設立

——社会人1年目に奨学金基金を設立したと聞きました。

大学時代、ゼミのフィールドワークでフィリピンのスラムにホームステイをしました。そのホストファミリーは貧困家庭であったにも関わらず、出された食事が食べきれないほどの量で驚きました。しかし、それもそのはず。実は私が食べた後に残った食事を家族で分け合って食べていたのです。また、夜は狭い家の中で最も風通しの良い場所に寝床を作ってくれました。後で知ったのですが、家族は土間で重なり合うように寝ていたようです。感謝の念が湧き「一宿一飯の恩とはこういうものか」と思いました。

その時の記憶がずっと自分の中にあり、いつか恩返しをしたいと思っていました。そして、社会人1年目に給料をためて、そのスラムに暮らす小学生を対象にした奨学金基金を設立。地域の高校生や大学生に無料の補習塾を開いてもらい、子どもたちが学習できる環境をつくり、教科書が買えない子のために小さな図書館を設置、辞書や本を貸し出す仕組みを整えました。

——スラムの学習環境はどういう様子だったのでしょうか。

当時、その地域の小学校は教室が足りず、成績のよい子どもたちの教室は校舎の中にありました。成績が低い子どもたちの教室は校庭の片隅に机が並べられているだけと、信じられない格差がありました。

スラムの貧しい家庭の子どもたちは成績が低い子が多く、格差は広がる一方です。適切な勉強をすれば成績は上がります。勉強する内容を整理し、学ぶ場と習慣を作ることで、子どもたちの学びたい気持ちに応えられるようにしました。

1998年にスタートした活動でしたが、無料塾の成果もあがり地域の子どもたちの学力は向上しました。中でも優秀な成績をおさめた奨学生を対象として、貧困層から社会的なリーダーを育成するプロジェクトを開始。これまでに同国最高峰の国立フィリピン大学に5名が合格し、うち1名は今年、医師免許を取得。スラムの貧しい住民向けに無料で簡単な診療にあたる活動を始めます。



今でも毎年家族でスラムを訪れています
現地のお姉さんに優しく手をひかれる息子

——楽しみながら、なにかのために

——森村さんたちの支援が次々と実っているのですね。

2003年からはフィリピンの児童養護施設の支援も始めました。18歳から施設を出て自立を目指すのですが、フィリピンでは雇用環境がとても厳しく、大学出

ていないと仕事を得ることが難しく、貧困から抜け出せない状況だったため、専門学校や大学への進学を支援してきました。

ここでもフィリピン大学に進学した子がいましたが、卒業後、進路に悩み、日本の大学院に留学をしていざれば社会貢献したいという希望があったことから、現在は青梅にてホームステイしながら勉強もらっています。

社会課題を解決したいという想いで、さまざまな活動をしてきましたが、一人でできることは限られます。

一方で、身につけた能力や経験を、自分のためだけでなく、地域や社会のために使いたいという人は必ずいます。こうした思いをもった人たちが集まり連携することが大切だと思います。

——素晴らしいと思います。輪を広げるコツがあるのでしょうか？

様々な方法があると思いますが、ひとつのコツとしては、楽しみながら活動することではないかと思います。

時に大変なこともありますが、楽しむことが継続と、人の輪を広げるためのポイントになるのではないでしょうか。



後列中央は私の息子。たくさんの現地の友達と

新型コロナウイルス関連のご意見・ご要望をお寄せください!!

都民ファーストの会 東京都議団では、皆さまからのご意見・ご要望を受け付けています。引き続き、いただいたお声を東京都と協議して対策を講じていきます。皆さまのお声をこちらのQRコード、またはメール・FAXでお寄せください。



“民間でつちかった力”で 東京大改革 民間での経験を 活かす



——支援の輪を広げる一方で、ビジネスは順調だったのでどうですか？

個人の力を磨くために転職し、プルデンシャル生命で営業経験を積んだのちに、(株)保険見直し本舗の取締役に就任、経営に従事しました。

会社を大きく育てるには管理部門がしっかりといていかなければと、初期には総務人事部や財務経理部を管轄しながら、会社としての基盤を作りました。

事業は順調に成長し、売上は10年で10倍の100億円規模になりました。サラリーマン時代の経験や、中小企業経営者としての体験は、議員になった今も生きています。

——具体的にその際の経験はどのように役立っていますか。

顧客のニーズに向き合ってきた経験は、都民のニーズをくみ取るために役立ち、費用対効果を追及する視点は政策立案時に生きています。

民間の視点を持ち続けること、民間の当たり前を政治の当たり前にしていくことなどを意識しています。

震災復興支援から 政治の世界へ

——順調だったビジネスを手放し、政治家に転身したきっかけは？

2011年、東日本大震災で東北地方の沿岸部は津波による甚大な被害を受けました。

縁あって復興支援活動に携わり、津波で家を失った住民の皆さんと協働し、人が住めないエリアに指定された土地をどのように活用していくべきか提案。最終的に公園用地として、市が買い上げることに繋ぎました。

活動は5年続き、この間、行政との度重なる協議を行った経験が私にとって政治と直接関わる初めての機会になりました。



——都民ファーストの会から出馬した理由は？

政治の役割を強く意識し始めた私は、女性初の都知事に就任した小池百合子主宰の政経塾「希望の塾」に入塾。約3000人の塾生の中から出馬を打診され、2017年に都民ファーストの会から出馬し、都議に就任しました。

仕組みを作り、 現場感覚を大切にする

——都民ファーストの会での役割を教えてください。

都民ファーストの会東京都議団では、政調会長代行という役割に就き、政策立案に携わってきました。

都ファは立ち上がったばかりの地域政党であり、長い歴史や大きな組織がなく、また、国政政党と異なり政党交付金もないため、活動資金もすべて所属議員が持ち寄って運営しています。

私は、ベンチャー企業の経営をしてきた経験から、ベンチャー政党である都民ファーストの会の仕組みを作っていくための提案をしてきました。

とりわけ政策立案プロセスにおいては、いくつかの提案が採用され、前回の

都議選で掲げた400件近い数の公約をいかに管理し、実現に繋げていくか、所属議員ごとに分担をして推進していく管理方法を提案し、その管理を任せられました。

この管理手法はマニュフェスト大賞で優秀賞を受賞するなど、全国的にも評価いただきましたが、現時点で約8割の公約が実現したか、実現する目途がたっているか、いずれかの状況にあります。

——新型コロナ対策にはどのように取り組んできましたか。

現在、私は都民ファーストの会が設置した新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチームの事務局長として、都内全域から所属議員に寄せられる課題を集約し、都としてとるべき政策にまとめて提案する役割を果たしています。こうした仕事の際にも、実際にお困りの方の声や、ご不安、ご不満を抱えている方々のもつ感覚にできる限り触れるように努めてきました。

ある意味、現場がもっている情報は、議員が知っている情報よりも膨大で価値があることが多く、今後も「都民の声」や「現場感」を大切にしたいと思います。一日でも早く事態の収束につなげることができるように、引き続き力を尽くしていきたいと思います。

——本日はありがとうございました。



常に現場のお声を聞き
政策立案に活かすよう心がけています

都民ファーストの会 東京都議団 森村たかゆき事務所

〒198-0036 東京都青梅市河辺町10-1-3 スプリング河辺1F
TEL:0428-78-3218 FAX:0428-78-3228
MAIL: takayuki.morimura0720@gmail.com



公式LINEアカウントでも
情報を発信しています。
ぜひご登録ください!



森村たかゆき

検索